[illegible]豊物語　上

山

或日乃つれ〴〵老人又六人集りて世上の事
共語る示ふ素人玄斎と云者ハひろくものしり也。
三文庵楽斎入乃がかんがへしを見て
乃うちに書をときたる常楽縁五十二冊わ
見是を云ふにて此二冊を一部とし。
先見集と号して此冊を一部とし是を
だい〳〵わ独語と名付たりされバ人ハ
見せむとする網を同じこれバ又一言
悪をおりのまゝするとも肉ハなんご
とくきんのうりきわざ余ひくし

ものゝうへまでも記し。たゞとのゝが氣味をふく
さむといふ。此者碁數寄にて。枕に目を
しわ付退もなさずんと。夜をおたり。
碁にかゝりて後念をも忘れ食をも
忘れ。日乃暮。夜の明るをもしらずば着
友達二人まうとくたゞ寄りて。人々碁打る者に。人
いふ此文をかんるに。小田原北條家五代乃弓矢
乃いくさ。わり。是をとひろひあつめ。拾冊にあ
つめ。題号をも。北條五代記と付る。扨又いふ
しへ今乃世時代迄の合戦をも記しとも見をと

撰あつめ八冊に写し。是をば見聞軍抄と
号すと見るとも。木算いまだしらずとぞ。彼
人の是れとたゞひとせんやと思ふことにとめぐ
らし。どのゝくに此文を見るべし。當ぞ硯
箱を懐中し。わがこころくのまゝを写
し叙て後よろいん。されば先に行き碁を
打べし。客は詠ありもしまるべしと。木算
が宿へも。碁をおもふまゝにして書つけ翁が草
庵へ入てかんるに。紫のさ。竹乃あくら戸。物
俺しき住居。筆硯のあたりに件の草

紙をはりなどして。玄斎とうつりかはるにこそ。
碁をうち給ひ玄斎ハ是によりて。碁を
打たまへる見物せんと集り。玄斎云。碁
見物はさし出べからず。皆々ハそれ〴〵遊する双紙
のかくしまして。極びたまへ。碁ハやがてさゆる
やといふ。皆々退き。彼双紙を披見しける
に。江戸繁昌の中をも記して。其外名々
様々の事したゝめ。一人云るハ。此文は読
囲一見の沙汰多し。それ等の此。日本国
を頻乱し。思ひあはせしとく。頻乱のさま

斗をひろひあつし。三冊に集め。題号を頻
従御諸と付たり。又一人云。此内に。酒をあひ
もちる人多し。其上上戸の沙汰ごとく。酒乃沙汰
をえらび出し。一冊にあつめ。猩々集と名
付ぬ。又一人云。此内にかるげな物の話其多し。其
中ハ是がこの道とひろひあつし。一冊に集
め。鸚鵡集と名付ぬ。又一人云。其上一冊へ
物語をみるに。遊女をおもひもちる人多し。愚
老おもふに此ハ又ごろ乃かのこと。今に指を
折くあつめども。是老ぞ道楽果たりき

まふ。今此文をよんで。いましめへと思ふ節あらば
とて。趣意のうきをひろひ出し。一冊と
あつめ。外題を物語と名付たり。玄斎の
碁は。いましめとならざるや。目も當られぬ態を
帰る。火をともし。碁打果しまへといひ
もとく退散もと。右の順禮物語は是也

順礼物語目録之上

黄檗寺一見乃事
鎌倉乃名所和哥の事
陸奥一見乃事
金沢の地景の事
京大仏殿一見乃事
唐が原一見の事
熱海湯治乃事

明礼物語上

○在原寺一見乃事

凡し人昔。慈覚圓仁乃時分。大和國
よかりの石上に付ねがふこうは俄教堂ま
廃れりぬ。是なん在原寺と云を出て。
○石上ふりにし跡はおかれよ是在原寺
の名乃ミ残りまつりとはもとさミ。体しふ我ま。
七十にあまりる老僧ぞひとしきさ袂りそた
だ独とり。庵を結とわれりるぞ。在原を
尋ね寺の様人の一首乃かなかあそやさ

しるれどりかし在原寺なかりしひとつのは
まさとおとこ面うふ譲りまふるときざ文だ。井
筒乃ふるとひそぞようお月えて。ふしとわさせ
てくるりなりりかんまとたしぶつ是庵のう
ちおちやうもと月ごの嶺とつきざころす
蕗をと一村植置さりぬよさとわりよいさう
井おりの老僧ゆふされたる水井乃りと
おぼうひとのあわりつ尾の息女。ふう
ぬたりひとまゆげとまらうどにありてもおろへ
袖とりけ。我よのそかひぬ。楓又一村蕗かぶる

塚のまことなるかひあしへの翁なんつゝし
きゝしき衣とく袖りかしよ。梓よりわざ
めかくり造らしむ。我女で。かりきれ
昔がらりありまゝ。五条りよ。乾斗。その外
とて東原の昔の翁なかんるそなつらし
と。みる云乃棨定おりとひ助し。今乃世迄
も東福寺もびしくかんえんはべ。いひわ卍間
だ。巻備ゆのて。ことせ大久保彦九郎。諸國
縄打より家とめぐられしが。ひ德上寺へ来り。
形乃名册とぞあらしに、其備首くば

しひめ上寺に。遍昭僧正のひけまし。小野
小町。よめりひかんとて岩乃よりたび
袖をとられど。こゝにも苔乃衣とのられ
まかさなんとよみて。それしお遍照の
返しは。世をそむく苔の衣はたゞひとへかし
さねばうとし。いざふたり袖んと。後撰
集にかんえんり。そのいはれのきゝ、霊寺消
跡とりといへ共。今いにしへおまで果ぬると跡を
入れたに古跡なりまで。ことそ。ぴ草庵へ又原の
寺領を付しまつり。是は古ひ乃外でも

あひの中にさまざまのはやりの寺〳〵の
寺領をとるにも。多武峰は三千石。祇園は三百
石。三輪へは三百石。春日へは二万石とかや。しん
をつるぶとろなりとよりかゞん寺の領せ
ての寺領堂舎をくさびしき小笠文石
の寺領は僅かしきとき。見とも像しいばつ
るの身たもとへる。衣食あるを不足なくて
ひ。何かとしても皆見れど賊もつしか
らば。衣食の中にも入ふん道人の中には
は衣食ありと仏教大師のかゝはしゝ食ふ

気をはらくの也。衣は寒さをふせぐの也
也。出家たる者は。三宝(仏法僧)供養のつとにゆう。
在家の方もけしと。なまるかぐの衣食は満足
せり。たとひあるとしても。にぐるしくはなし
あり。極楽は身をよつくしくれ。心安くたのしひ被
仰しく愛だりのなりなる。安楽を願ふんと
て皆人身をくるしめくこゝろを悩む。大
寺よりこく。大領請る人は大慈悲をまよ
て上をとりて楽をも。仏法をつけられば。
ん愚かしむ。安き時なし。名利の男

とくりむるゆゑ也。しかれども古今の言葉
まことあるとはいへども、まよひあるものもあり
ともおもふべし。此ゆゑに心のさはりとなる
ものこゝろにかけてまつべし。愛別離苦のつとめ
也。然るに和光の深き心をもさとるべし
也。仏陀のひろきめぐみをもあふぐべきなれば
見聞をもおもんずる也。ゆゑに貪欲の盗賊多
しといへども、花の山寺は慶長十八年月廿
五日。病死せしとぞ。其亡魂をとふらひ。并
にて毎月七日には。南無幽霊。出離生死

と廻向しけるとぞ。なかにも成仏せざらんと
執魂しけるにや。毒蛇のごとく邪執の思ひを
まもる也。何とて布施にも心かけず。仏のみちをも
なげきて善根の一念も忘れて縁を絶せるのためと
なりて解脱の因とならんや。是は滴
因縁乃貪欲のまゝにてや。猶も三
張白銀に包みて。あつしけるとぞ。蒼龍の
とりてこれはのちにさへ其ゆゑに紙
衣をくるもとおもふとなるもの。とて二縁を
一かたのいのりにやあらんと。ひそかにおもふ

面白や雅やかなりし梁の武帝。達磨大
師に問て云。朕寺をたて。僧を度し。
なんの功徳かある。答て云。無功徳と云
々。さればひとつのみかや。白楽天が詩に。狂言
綺語のあやまりをもつて。讃仏乗の因と
なすといはれたり。是剣。がんなうたく
かざいのんなるべし。かへる面白酒僧の糸
あひ親を又一[illegible]なくて又奥なかるべし
げにもよしそや。うたがひ綺語をもつて。
讃仏てんがうのまことの[illegible]へ

なす道も人の心の花の曲。いかさまこれも是
とくとて。御法の舟のみなれざをか。さすの
岸に到らんと。東岸西岸をうちひかれた。
老僧が絵讃あれ。かくあめつちの[illegible]をも
つくりつや。座を立て座へ入り。縁に生る
家。枯木を一本折持まて。我にあたへ
あみだぶつ是をとり。此枯たる一本落
入ることなかりしたくをさとり。めでたかる
是といへば老僧声をやけて。瓦礫
たちと成抱と何かさとく。おびらうんけん

ぐんと。平家ぶしは語かはりぬ。ちかき世
てば。瑞夢は謡ずさ。極又平家もまじきさ
とやらくちわ。戯論なすびしらぬ星は真言
深秘の法門たちまちもさまつた。一字かゝるも
はわ。問ぞんだからんなど我は又舞を
まうべし。げんぎん。ほろくのこうじの絵。
げんなくらだ。げんとくふかをしてだんぞ
や後の。かろくの絵とせつさいと。ふしま
ひなまでも。老僧やたらく。何と物とだおかせ
をなく。かくと。おうちげさ。称なり

あふるは暇にまかせ物語よしたのやとふとひいてぞ
まる座をたつ。立海らんとせつて老僧閑を
さましぬ。まつて去ぞし。汝はいげくの者ぞと
とひ給ふ。我ハ唐の関の東や日のなかの橋よ
里がたまつて。五刀のことをこえて退
屈あり。潮江戸よろしわ。葉する宿の軒端の
月を常に。かつもおかれけよかんさ○古京の軒
の板の下に苫じて思ひしらりをもしき
ね。頼朝康頼入道ぐ。讃のありをぞしつそな
らむとぞ。思ひあはせりね

将軍家系ハ左のごとし
系圖ハ八別にあり、この系図をみよ
清和天皇　貞純親王
經基王　満仲
頼光
頼信　頼義
義家　為義
義朝　頼朝
範頼
義経
實朝
頼家　公暁

○鎌倉の名所并分乃事

安し八昔。鎌倉ハ将軍家代々相續し。
鎌倉乃ちまりし。名所旧跡を數を知らず。
詩人哥人の都おりしとかや。然ども當代ハ
月卿雲客のあまねくありあひねど。
武家乃人々海道よりハ鎌倉一覧として参
らむ。あるらりありふまちま武列よ布を見る。
ひまりむ。鎌倉一見とてふしぎ行脚し。
家らしことぞむまちし。星乃翁よあひ
て。星月夜。鎌倉山といふまちをさしてり

いふ義をし入あへ翁草てされど鎌倉山名
哥ま多くよみあり。堀川百首ふ。○よまと
ひとりつゝ滝くる山をとこえ行ば星月夜
こそうまつられけれ。○薪とる。鎌倉山
乃こだちさを待とありいふで。恋つくわね
梅文塚の都とりよ通ふ帝列と云前句よ。
手ふもそる。鎌倉山を越るまでと平
栗盛付ふひぬ。鎌倉山の中芝来ぬし。
たゞ鎌倉中の山をさしてよめるなりやさ
れど文台ふ○雨がさなする。滝くる山や

鶴岡の井乃清風にゆるきぎ乃華葉○宮柱
立そめしより鶴岡とまくらし山とこまでを
いふなりとよめるはさまで鶴岡乃山とこそ。
鎌倉山といふ中絶しめ文同じく。見にし
がたけ。いなの瀬川はいはくぞや。翁草々く
萬葉よ○鎌倉やみこしがだけの雪消
て稲葉瀬川乃あまさりなりと詠ぜ
し。見し越山岩るは深沢村の神明山をよめ
り。いなのせ川は長谷寺乃ありわたる
浪乃見所なりと世人のいたるなれど常

業乃橋あて旅行○名にしおはば松よふえ
て東路の。ときくの橋よりふる薮波と
詠ぜり。行瀬川めぐく長鳴○海の事らく。
又かんの中を見るぞせ川。おごまでの乃ぞと
まりぬ世なまでぞとよみけり。後白河院と。
親王といへるひなる所めぐく心緒○若狭代
よ。難をけくしてゐる不しる。一寺人乃ひ
とわおもぬと讃り。建長寺乃霊鷲園
鑑を兼翔して○贈まと世乃面影とめく
身を命るぢらひ墨らか方まと鏡の椒又

延喜殿。ちうさき年 松殿めぐくだらりせん。
ほどへまでとよ江口もゝくこれも便をまつ
乃塔山。霊前○いめし人乃。猿ともしらへてたた
えてまうさうそんぐ。鎌倉乃里とくこめわ。
又向そのくどぞ二ヶ条ハいそくめくゆぞ。
翁草く。長明が方丈○八雲乃。八千世
のうぢよおもひたえ。孤上乃よ。交易處
又西行○うくちらく。孤上乃よ駒とめく。
片瀬の川乃。塩干とぞまりとも詠ぜむ。
道具片瀬乃延命地をまりゐて。西行法

相州公八代和泉守 乃公源左馬頭義経 三男也
卜伝ハ 伝来北条時宗 大尉寛法依 出家ストモ云

御鎌倉へまゐるゆハ北の紀ぞや。翁草
義経公文治二年八月十五日。鶴岡乃宮の御
前清ありかり。翁老僧一人面弁乃鳥居まで
いさいしを一切かんすひ先をおやしく槐源
右大将乃尉乃霊宝をもつく名字をとう
めうの乃一所よ御寄進のハ尉寛法ありに今ハ
義朝とよ長もとく云。頼朝公の子乃頼
御かそ田もしと前よめされ奇乃弁よ。
ろうるの中にすて義ろう西行中して云在
様乃その乃わりよ最風をとをりて

秀郷朝臣系圖ニ云
正二位左大臣
冬嗣 大織冠五代孫
良房
基経
忠平
師輔 兼家
藤成 豊澤
村雄 秀郷
在支那系圖云々
五代孫也

いざとよ保延三年八月とんせいの時。秀郷が
流れハ其九代の嫡家相伝の兵法を焼失へざ
いづくの国たりとも縁で是を寅うていそぐ
まゐりしをめずらしくさきやうく千年ぬ。
縁者の花月よ乃のし。勧感しるおりふ
しふの三月か成一字をあのうち世の。親先お
むくんなる縁ざりなしと乃る。ちうる為か
ふかくのくハぜんざうにまて見えとりさん例。
能後権守俊兼として是を弦染と記し
そうしめのみ中。よろつるべしもとがくあり。

重源ハ紀氏系圖ニ云
長谷雄 三男 淑信 紀伊大輔
十二代之孫 季重 讃岐左馬允
季良 右衛門尉左馬允
季康 香羽院武者所 藤内所 従五位下
重定 兵衛尉 上﨟滝口
重源 入唐僧 東大寺閑山
従俊乗 刑部左衛門尉重定ノ子 発心時重源 大佛修造ノ時俊乗上人云々

十六日午の剋。西行上人絶命して。二千余りの
は極楽往生せしめたまふといへども是おつく見えり
なりけるむ。二十余ちの往生乃縁ことを是
てぞちりおてらる見と極楽しな
がら。門外よりそ。教超乃みどりのまあ
ひさく。是とおちる也。是重源上人
の約術をうけ。東大寺まうして綸命
を蒙りて。奥州よりおもむくぞ俊秀を
て。将恩をこうむんまいと。陸奥の秀衡ある。
上人乃一族のりと云ふていまだし嘉禎三年

時頼入道出家之号最明寺

貞盛　鎮守府将軍　維衡　維将

維時　直方

維方　時方

時家　北條四郎時政

義時　泰時

政子　時氏

時房　経時　時頼

時宗　貞時

高時

丁酉北條……時頼……

世をそぞろにまよひけるさまたゞ君見えのみにて
盛りて。猶世にさまよふがゆゑの哀なるにあらず
にわび。是によりて山に入て。我身の程まよふ
事務がたきにいはれしと。花をしたふ中にも
假の者。一筒の淨智を。我身につきて。後身まよ
絶付。夜更もしらず。無法乃家業をたつる
をもてあそびぬ。然此ハ天下太平にまかせま
思ふたる衰の力を義によりあさぬ。栄
花念いふふの人ぬし。富をさせるふしぎさ
所に洛水を亂を思はせるかれ。その古雑

○さよぢされば西行在俗の昔ハ。ことさら
われとふりすてし名利よれば。さらさらに後
の世をとむらふくるしみを。このたびうけ
て。いにしへの世にうかびて。狩の旅ぢん
ておもむくゆへの。わすれんともえんせ口
思ひ立。前業のたのしひ。長生殿のさかへ
たび立の夜の旅ぞうし。夜枕の軒に。旅
宿の月くみて。もろのあけがたの月のこゝし
と歌し。猶よるは二十丈の瀧をみて。他
洞の水面をみて。花の散を。麻苧衣にぬ

すぐ妻子を捨て。ゆくゆくさきは海とうち
さがのおくに入。廬を結び。常に安養
界を願ひ。後は諸国流浪し。山林の
ひ。一所不住の行ひをして。高野の麓に二
年三年をすごして後。紀州の槇の
奥に入。枝打せず柏山にこもりて
さまよひぬ。一所に住ずや。と嘆ける
○山里に浮世いとはん友もがな。やくしく過
し昔かたらんとよみ。春の花。秋の月
の散を見ても。無常を観じ。花の

生を終えて。釈迦如来の入滅二月十五日
に。往生をとげなんといひしごとく。○願はく
は花の下にて春死なん。その二月の望月
の比と詠じ。常に願ひしが。かの
ごとく建久九年二月十五日。八十六歳
にて臨終正念にして念仏し。極楽往生
をとげられけり。臨終のありさま後十三年
目に卒去せし聖。八十四歳。其後
の旅なども。六十二年の修行と知られける
とりと臨終にも

○陸奥一見の事

又一ハ。今愚老むつの国行脚とんざうし
下りける。下野の玉生野と云里に着
ける。其のかたハらなる古塚の上に。桜木
の柳あり。蔦葛まとひかゝり。青苔おほひ
を埋ミ。星霜幾年ふりたり。めづ桜是也。
遊来ありげなる塚なり。いにしへの世より
乃。古跡やらんと云へど。里の翁答ども。是ハ
朽木乃柳とて名木也。西行法師此国
へ下りたまひしが。此ハ名の玉なりしよ川

岸乃木かげに立寄て。彼の道の辺に清水流るゝ
ふ。柳陰しばしとてこそ立とまりけ
れと読給ひしが。新古今に入れたり。其
名を遊行柳と語りつたへて。枝ハ傳へ
浮しくも名木の柳まで残るぞや。あはれ
不思議や。遊行柳の謡にも。上人上総の
国よりみちのくへ下り給ひし時。此あたり
付きて老し白川の関をも見るに。此ほとり
わたりわかきとけりといひて。手を取け柳をとかん
立ゆへるとかや。宴へ下野の国ありし。謡にも

遊せりといへど翁言く（こたへ）ぞきこえハ深乃姥
背前後をもつてわかやまりく能わたり
いふへりわ。万（よろづ）もつてわかやまりなきさて（へ）未
成るけ。世のならひ也。是より白坂を
こえ関東の地余里（より）奥州白河の関
ありとりゆかしくて漸（やうやく）みちのく白
川の関よりかゝれ時（とき）しるさる乃なうそ紀
乃さかりせ。極文関（せき）といへしかど守人
もなし。行（ゆき）かゝりて乃袂（たもと）をとぞ春乃気色
やとぶむらん。続古今（ぞくこきん）集。続の前ニ

○おなじく八鈸（こえ）て見かけまつし白川の関（せき）のわ
なかしこの塩（しほ）がまの浦と詠（えい）せし見えかけま
くわしさうよりいづちやらんと岩へばとそは后に
しの岩（いは）手（で）乃おもふ乃里なりまたへやたどる行
末ハ浅香（あさか）山かげさへ見えぬ山乃井の浅（あさ）
ましげある鈸絶（たえ）ぬあさま背（ひ）と思ふ山無
ひとからしふ道もなく。さうけれかなまとぞ名
取河（とりかは）瀬（せ）この埋木（むもれぎ）あらはれてく
霧の陸奥を行かて行きかう十府（とふ）乃浦。
風乃音（おと）しこえかくよ。波見こゆえしと。

本乃雲山路をへてくるまゝに。ちゝの志
かゞまりし小舟ぬ浦乃景風籬が島すぎてゆく
ことなる様なり。寶よ塩竈乃神乃
御社見えて。此浦神ハ。旅人をあはれミ
あふとしや。ざゝやくえんなずりる塩焼せし
あるかとか見まくで。大さなるかまニつあり。
かく廣大なるかまは。世よ又あらじ。是よ
て昔何とかしきらん。但此在所を塩竈
と号もとまふでぐうしかや。貴たふとかりけん。是ハ
いはの世よ終来たるを聞ぞ。里乃翁語るて。

田村将軍。東夷をたひらげあひし時。又万八
千乃兵粮をかしきたる竈也ともいふ。此海あび
ゝしさ之年乃かんぬ又。浦々と見いそぐく捧り
せん門をおぼろけ。神也。松島小島乃一見さん
ざし。塩竈乃浦よりいわぬ舟よ乗さうしく磯
邊ばたひとある波よ。浮る浦く絵を乱
て殺かゝれど。此浦の眺望ハ島が袖に画
もべらばかくるゝ語る云乃楽を分かとそこ
とせし思ひおなりぬ。そまよりわらくミ野
をあふ山をこえ。漆平泉よ付ぬ。此所乃雲

社ぶつかくを。拝みめぐるに。幾千万ともいふことを
数もしらずとぞ。さるまゝに関西には。山城
大和の国に。おゐて。いにしへより大がらんあり。是を
こそせちにたるとおもひしに。ひがしには平泉
にてらくが建て。関西八千分にまして。是一つにて
たらんど。抑是は。いつの世めでたる人の建立
せられけるぞや。不思議におもひ。或寺の老僧
に尋ねられしに。僧答ていはく。是は。鎮守府将
軍。藤原朝臣清衡。基衡。秀衡三代の建
立せられたり。されば清衡朝臣。秀衡法師

の子息。泰衡。国衡らを退治として奥州
へ発向し。悉く追討せしめ給ふ。其時。平泉へ
着御ましまし。諸家一宇も残らず煙とけし。
もとちやうのえんなんはせさだくとんく
なし。未申の角にあつて。一宇の堂ありしか
里。ぽよえんの難をのがれ。是をたづね
あつく。葛西三郎清重。小野寺十郎重成
らをもつて。はやく見せしめ給ふに。沈
檀のげの外の厨子をうちかへて見れば。
をの網とく。牛の玉。犀の角。象牙の

象牙水牛の角。紺瑠璃さうの物。こがねの皆
玉の幡。金七宝をもつて蜀紅のめしき。玉
よね。いづる帷金の霧。あるは作りの瑠璃
の燈炉。南廷百とのく金のくわまうるさうなり。是を外きん
ありしまうらかずへつくしがたし清衡基
衡秀衡ら。ねん宇の堂塔。建立せるよ
しるせり。民部少卿藤原ぬとをせつてるくと
いにしへそうもよにいうてふらうろくうつたのかずべ
かぞろふ仏閣のうんじめと頂経せんべしぜん
劔のごとくしんからひわてをとなわるべきのよ

しかるを後二条院の御代。清衡以下。三代ざうのやとう
をる堂舎をとかんすひ。忽ちにせんだんをとぼる
しかひ。清衡後。書写よりて平泉のうちの府
へせん劔よまうせぐ。ぶぜんにしのし。堂塔たとへ
そうもいのくのたわといふそえ。仏性そうゆ
のつとめおもてく塊以らそさ油たげとい
さをくべくしざるをしめてしまで寺塔以下経文
よ日をさと是をとりし中
○関山中尊寺の事 寺塔四十餘宇禅坊
三百餘宇也。清衡六郡をとりてやうしと

彼乃時見るを遠立せしとかや。まづ白川の関よりぞ
と乃境にいたるまで。二十余ケ日乃行程なり。
またひと町ごとにかきそへたる立ぷ画にて
金色乃阿弥陀の像だてるを絵図もて当
山乃中山頂上にむかくに乃ふだうたれ
て寺院の中央に多宝寺あり。釈迦多
宝の像をおたおりあんちにて中るよ。
くわんおんをひきたる振ん法華乃とくして。次に
釈迦牟尼へ二百余躰乃らんようをあんじ。
釈迦乃ざうを涙に曼荼羅のまへ

定朝ハ光孝天王の御末仏工家也
英我王　康信
孝天皇　康尚
定朝　頼助
康助　康慶
運慶　湛慶

ようんハ諸末像をわり。中尊金色也なり。次に
名だ陽大学士とまる三丈六中尊六三丈。金色乃みみ
だのざう眼立九躰。おむじさよ六なり。次
よ金色堂上下乃四壁。内殿皆金色也。
だり乃内に三端とりまく。まらでんなりわに
持経の三尊。二天六地蔵。定朝がを作る。法
守ハもとありち。南方に日吉乃御社あるとぞ
うさやうし。此方に白山乃宮をそまんじ
やうもと。此外。宋本乃一切経蔵。内外陣。また
うへん。狛犬乃ろうかくさう注をそくるよ。

いふ事ありしかど。その後。清衡は世に三十年
の間。我朝の延暦。園城。東大。興福などの寺
より。しんだんの天台山にいたるまで寺ごと
に。千僧をやしなふ。入滅の年にのぞんで。
仏像をはじめとして。さまざまの善根を百ケ
日におこなひて。臨終の時。一病なくし
て。合掌して仏号をとなへ。ねぶるがごとく眼
をとぢをはんぬ
○毛越寺の事 堂塔四十余宇。禅坊五百余
宇あり。基衡これをたつるなり。金堂を円隆

寺と号す。金銀をちりばめ。紫檀赤木
などをもつて。万宝をつくし。色々をまじ
ゆ。本尊ハ薬師丈六。并に十二神将
雲慶これをつくる。仏菩薩のざう。玉をもてかざる
ことを合す。むかしの例にまかせ。講堂。常
行堂。二階惣門。鐘楼。経蔵などあり。
九条関白家。忠通。額をそめられ。額を下
さる。参議教長卿。堂中の色紙形を書せら
る。このほか造立のはじめ。基衡は本尊
を。仏師雲慶にあつらへ。上中下の三品
をさだむ。しかるに基衡中品を所望せし

め功を仏師にあたへける。金百両。鷲
の羽百尻。七間まなかの水豹の
皮六十余枚。安達絹千疋。希婦の細
布二千端。糠部の駿馬五十疋。白布三千
端。信夫もぢずり千端。此外山海
の珍物をそへける。三ケ年の功をとぐるの
あひだ。上下向の駄。山道海道のあひだ。片
時もたゆることなし。又別禄として。
生きぬを。舟三艘につみておくる。
時に仏師抃躍のあまり。戯論し

て。いはく。喜悦これにまさるといへども練絹
ならば大切なりと云。使者かへり
て基衡にかたる。基衡後悔かぎりなく。又練絹
を船三艘につみておくりけるとなん。
かくのごとき功の沙汰。鳥羽禅定法皇え
いぶんましましければ。仏像をおがみたまひ
てよに比類なしとて。洛外にいだすべ
からざるのせんげせらる。基衡心神
をうしなひ。持仏堂にこもりて七
ケ日断食をたち。さいしよにて

九條乃関白ようまへ申もとのる殿下天台
座主がいめすひ勅額をかゝり。井
は先をを安置しなる。次は吉祥堂の本
佛なり。次は補陀洛寺乃本尊を模なり
安置の也。観音たくごわり。げんちう乃
霊像なりのなり。さくふ丈六觀音乃像と
こんりうし。其内は佛乃本佛とあるあ
なる也。次は千手堂。本像は六郎尼との
く金銀をちりばめる也。経守は当寺へ舎
出山なと。東南よわがめなる也。次、最勝寺

いまだ功をへざるいぜんに基衡入滅せらるゝによ
よつて秀衡これを作りをはんぬ
三面乃とびら。法花経二十八品大意をゑかい
し。本尊は丈六弥陀仏、薬師乃丈六也。次は観自
在王院阿弥陀堂と号す。基衡が妻ひとめこんりう也
四壁乃ぼた絵は洛陽の霊地名所を写せん
は銀也。高欄は磨金也。次は小阿弥陀堂。同
く建立なり。ちやうじ主さうし。額は参議
教長の筆とそれゆる所也
○無量光院 中に新御堂と号す。秀衡是
をこんりうせり。本尊乃うちの四壁に

びく。観経の大意をとかしめられけるに
ひそかに扉ひらく。時に横川乃てのをとかしけり。
弘仁かぞゑ三年乃ま。三宝乃寶塔内乃志
やうごんごとくして宇治乃平等院
を模もうせし所也
○鎮守ハ中央地社。東方に日吉白山乃両
社。南方に祇園乃やしろ。北ハ天子乃権社。西方
に北野の天神。金峯山。北方に今熊野。
稲荷等乃やしろ也。ことぐく社乃よ
うかひとめたまたま

○年中恒例法会ハ二月常楽会。三月
千部会。一切経会。五月舎利会。六月新熊野
会。祇園会。八月放生会。九月仁王会。毎年
をこたる事なし。武清平顕にまうで
衛ごらんありし乃旡量光院をまなばれし
あふぎ宇治の平等院の鳳凰堂をもとの
所也。世の最肉として候よりしを。
中ころ藤衡去ぬる康保年中より江
刺の龍ごもりならむ岩井乃郡のひら
いづまうして志ゆくらんとして卅三年

と名くるハ出羽の國一万よ
乃村ありぶつかうと立仏性をゆゑにて。
基衡の毛越寺福文よもとにあんとや
うもれける文三十三年也文ようだうして。
秀衡父のゆつりをたえ後をしとる
海をおうし三代鎮守府将軍乃宣
旨をもらりてうり乃ちたんろく父
祖よりえ為ようして滅よぞよぶ文三十
年送く卒去す巳上三代九十九年の
ざうりもる所出塔千万宇と云

事を知らぬと。相続しすひぬ為老ぶと。
出もそぐて記し待る

○金沢乃地景の事

是ハ今為老武州久良岐郡ニ志たん
まいせしよ。金沢のみなと。海辺のてうだ
う。世よ比類なき境地。空海又湖乃風景
立所よあらわれたり。此湊を九ケ所の海
中へ出ぬよりてぞ記で湊お為乃うちうり
ハ弁才天満おさまし。此西湖。洲中みく出
合をあり。又千葉将乃瀬戸ゑてく橋かゝり

たり。内海ハまんくたる大海。平地よも
らんとこそ。志ほの満干もやさうけ。さる
またふるよ梅あし。橋乃ほとりよ看て。
月をおどろかしむるかり。也志づしくかんる内
は大海ハ干潟と成て。真砂平ことしてかん
西ゟけさるふあし。是こそ。ぐんたんのかり
捲簑のさめたる心地もと。何おもえて山海
ざうぐん。千珠満珠と今こてよ志けめたる
うと。不思義のおまわりよこまをとりてん。
友をるけまでは口号侍る〇此浦よ話の文

たゞやうらむとらん。満干乃玉のぎどくわら
ハしとぞ。いりうふる梅又此前の海ハ又東より
野鴻が濱ハ。南よりもひかまが濱。あ向ひ。
天ある一町。行乃大瀬戸ありて。堀乃満干
あり。内ハ広き大海ふして底ふり。汀の
めぐり八三里ほどうちのいけぼ行あげてうぞ
みべりしむ。そとハ海ありてよハ陰地とあふ
まこく。猿猴夜鳴えがし。語うりびハる
よりは紗豆山こさんたくさんそびえまいげん
の山嶺ハいぐさきたるふ。土は乃高海よここふ

らず筑紫の浦〳〵みちく網引となる世ぞし。沖は
かゝりくる。海士乃小舟数しれず見えわたる
村々も豊め。漁まわさる夜々の鳥乃鳴わたりつゝ
賑しき。志やけ。町やかよりや。古浦の。塩
やく煙ハ山よたなびき。鶴ゝ。あしゝま。塩
たゝりくとみちる。波。ゆうりくたる。磯辺乃
松風ハ琴乃音とまうかへるとそ聞ゆ。
南ハ海。北ハ巌けはしき。補陀洛寺。龍現も。ハ絶
まことなる境地ぞえがたなり。山々のも
みぢハ。錦をさらすがごとし。拾遺よ。

○氷海り。秋乃山辺を移しくみえたるこそめでし
廣錦とぞ見えるとも。観音の縁ぜしてまこ
とおもしろし。これ此安乃ハ。南地まで名所旧跡。
あまたありて。其の名所ともや。是をも皇
人よ親ぞゑやとおもしよ。都よ。是よ。若わりとまれ
開くらく。当所たりはじめく一見乃者ぞさ
ましけん。金沢ハ八景乃詩文と云し。皆人
賞ひたり。相ハ八景ハ。いづくそとききて名付
らん。爰よ夕ハ。朝音ぞく。金沢ハ八景の詩
云。世よりくまさかし。○瀟湘夜雨とハ。夜また

かへたる一村の。ことごとくいふ在所也。晴天の
夜色をあらしむと西そく。洞庭秋月ハ向
ひの月○漁村夕照ハ瀬戸○江天暮雪ハ
野島○遠浦帰帆ハむかふの山○山市晴
嵐ハたうげ○平沙落雁ハひらかた○遠寺
晩鐘ハ。称名寺。是を八景と号すとぞ。又ある
説に。石碑八木とて。此ほかある石碑を
や。是をいげくはめづらしきとあらはせり。
翁草とく。石碑八木南雨の名称也○毎女せ
き○うたゝせき石碑ハ称名寺の中にあり○あく

せきハ瀬戸にあり○とびしハ金龍寺の上にあり
あり。是石碑と八木と名付ハ○もくめが崎の松ハ瀬戸
浦にあり○びやくだんハ瀬戸にあり○黒梅○桜
梅ハ西方ハ称名寺にあり。但今ハ絶てく
なし○文殊堂桜○普賢象桜○西湖
梅○青葉楓ハ四本ハ称名寺にあり。宗
祇乃高にして。このうらをめでゝ。時雨
ふるハいつくにみどりあり。宗牧乃発
句ニ○秋もいさ。青葉に句ふ紀。此露を
米殿の御ざに○ぱにさこの一りて

の。紅葉（わかかへで）楓。時雨（しぐれ）にそめなせる。秋のあはれとも見えし詠（えい）
しるしためし人へは今に至るまで詩人（しじん）うた
人（ぎん）。団地（たうち）へ義（ぎ）を集めつ。詩をとうらぶらふうたをど
しるすものおほけくりぞろへかしこくとしるしふ。
まされて此浦の景風（けいふう）もよしかもかんそ自
ずおもふところとうくぶゆへに当代（たうだい）の名画（めいぐわ）狩野（かのう）
探景（うきやう）。江戸の御殿（ごてん）に見えとうけたまはる。
そおほまりしも今井（ござい）のまちとやとうや。謹（まこと）に
団地（たうち）の景（けい）かん殿あふかうゝとれといふべし。翁（おきな）
ゆかとく當浦の景（けい）天下無双（ぶさう）なりとうけとう

つきまとひたるも乃の鳥（とり）の絵といふ人の此をかき
へゆしよ。今塁（るいとう）といふ名絵師。此今泉（ござん）山にあそ
び漆（うるし）の名を樋（ひ）とひて画（つく）し写（うつ）しける如
よ時見よりしけり。引塩（ひくしほ）に浪（なみ）干潟（ひかた）となれり。
平地（へいち）と成てかゝりし面影（おもかげ）さらになつかし
そ今塁（るいとう）。絵そて捨（すて）ての山へのゝ。此の
まさらめしなりけり。此山に堂（だう）をたてし足
そのけだうと名付。又一稚（せう）よ。此堂にて
よくかんく写（うつ）しける能見（のうけん）雲（だう）と書して
見いふ。又またくもせしが。此堂わり昌地（しやうち）○学（まなぶ）

一かゝるさりしところの狛犬見えて、前句を
せうまつりに○墨絵に山ぞ見ゆるあらはしたる
一と絵馬付られ。金岡ハむかし絵に山を千丈
重なるをあらはしたり。又金岡四代目乃廣高ハ
又童なるを書たりまたなべ絵にも浮ぶところ
かれなるとぞいへり。金岡ハ仁明天皇乃御時の
一人。承和乃比乃人也。慶長十九箇年までに
七百八十一年に成ぬ。此絵師上代乃ことさ
くつろし。いかんや末代にちかくとや。絵だに
南面乃風景などぞいにしへのそゝえん。おもんぱかる

紅江吾めぐる乃色がうしまへのあらん。卑しも
年月を経て見るあんゆうゝしうごう筆
めぐる見尽しがうし。御前に當代名ど
絵師。狩野なれども當世の名筆
まの人ぐゎなるむじとも云愚老をて都乃理
到極せり。是うれしくも見つゝ、金岡なり。
此漆。秋乃気色、塩みちたる所のとかんとく。
身よ系ゞて写まつりに干潟と成ていく
よくかけはさりたり。前にこそ金岡
八継をも描られ。和中掛に塩みちてかんじら

くもとなりくだりてたちと旅せしかゝる天の
眺望しは恵方の干潟ぞまさりけるまゝ海道
かゝる紀行せられし翁も夢の中に入る絶かゝる
鶴亀の名にも雅もかなひしみつまきぞやかく。
くだけ乃いざよひの光やん乃世なるとよ
めり。極文待野は物書乃磯辺塩の干潟
を写さまてふりしは常に紀の浦の
ざりるくおまへは鴎様は塩のくり。岩乃
そのまゝで浜ありおのしさでは鮑。ふく
だこのなまてたこの打つきて。磯菜はのりふるき

菩苒菩。神る草をごほく定めしかな草。
ましらめおらめ。海藻藻がんぐめの花桁り
おひ家うこ乃なもり浪よおもて
甲。鮮ちらびらめ。海老ましものぞ
こうろぐりうびた華くたる巻ご乃上
よ谷ぶだりそ雨ぐり。千鳥貝がんくるく
ひ乃も貝。おそ貝ぞおさし。櫻貝。
大ぐりおからの宝家中とおりが時えがれよ。横
ぶらしてふおらさ雨。さ家ちも
をよぶれぶぞぞよ塩とつふ。みちく尿

称(そ)どうけり。然(しか)し初(はじめ)ての人は生乃ものにてめ。
是聞けば殊に奇(き)けい長久(ちやうきう)の感懐(かんぐわい)をとゞめられ
たり。さるを是非いふ人乃今悪(ていとく)に今の
待野(うの)が。まさりたるよしあつかひぞれある
まとい。ふよ。今悪(ていとく)が残る弟子(でし)とも山より花(か)ぞ
して七百八十余(よ)年(ねん)をへて是を見と。ゑとら
如く人も有し。今あかひぐらき者が代よりあつかひ。え
ぐらき筆(ふで)を得(え)ても得ざるひそひたり。然ぞ。背(そむ)
乃今悪(ていとく)がもとぞ宗養(そう)は。今乃待野(うの)がための師
まかりむろやといひ名を書て。黒乃前(おとさま)なそ。

猿楽(さるがく)が延年(へん)。社務(たうしや)(ちよう)ともいふひとくさりあり
○京大仏殿(きやうだいぶつでん)一見乃事
見し人今。虫(ぐ)ちうの飛(さい)國(らく)から脚(あんぎや)をとゞむ。當
秋中旬(ちうじゆん)乃比より。此らひ武州(ぶしう)江戸を出てたて。諸(しよ)
國(こく)を巡りまはし。我かしも都(えい)に付ぬ。時は月
色無神無月(かんなづき)。なん原乃山くもの。まゝと
○忍よ散(ちり)残(のこ)るか。所々の紅葉(もみぢ)乃色。さもとぞと
となりの都(みやこ)乃景色(けしき)。如何にぞ心(えん)殺(ぢ)の発句(ほつく)有り
○月雪有り。夜と霜(しも)ぬ。都(みやこ)路とせしまゝ
長恩ひ出も作りぬ。それ程も家(え)も筆(ひつ)文

行先もさだかならずとおもひけるに。うしろの
方にさけびて。立帰り候へと云ふ。汝は梵果を得べし。又この
都乃うちへ入べし。道円法師乃許より
○勅許あらんとて。されどもちからなくおもひて花
ねらひける其ごとく。ごめがたくこれを詠ぜり。
世に按ずるに。さうさう名乃たのしみに名所
聖武帝のときに一見して。大仏殿にまうで
ば尊くまことにつくりたまひも。廣大なる金銅仏
開きおどろかしも。唐土天竺に。大仏の
といへども。皆是未だなきたけ。十六丈上

の金銅仏なりとて。古記にのせられたるさ
ま。三国無双乃仏像。我朝仏法さかんなる
うちのさいしよとなせり。かつ軽をとるを
きそひあひ。古今の物がたりにも様々これ
とりくはしくつたへり。此尊面は長さ十丈間
おくは三十丈なり。指は十二なり。ひざ八
丈あり。合九十六丈立御堂のたかさ二十丈
仏乃居たけ十六丈。盧舎那仏を安置
あるとかや。中ごろ南乃宝様。鐘銘ぶ
銘を切付られ。読に叶ふやうにして候

思ふ所に客僧一人来りて此銘を見てとく安しめたる偽りて云く

洛陽大佛鐘之銘

欽惟

豊國神君昔年掌普天之下位億兆之上外施仁政内帰佛乗是故天正十六戊子夏之孟相攸於平安城東創建大梵刹安立盧舎那大像矣蓋夫慕聖武帝南京之大像帰頼朝公東大之再建者也雖然慶長七年臘月初四不圖羅欝攸之變已為烏有矣凡戴髪含歯之類無不歎惜焉

粤

前征夷大将軍従一位右僕射源朝臣家康公謂

正二位右丞相豊臣朝臣秀頼公曰舎那梵刹者豊國之創建也不幸而有變也不能無遺憾焉右丞相何不継先志乎

右丞相曰盛哉此言愚茲丕發弘願輙命片桐東市正豊臣且元再建舎那寶殿始于慶長巳酉季二戌于慶長癸丑矣速畢其

功。此鐘に銘文あり略し侍る
旹慶長十九甲寅歳孟夏十六日
正二位右大臣豊臣朝臣秀頼公
大檀那
奉行 片桐東市正豊臣且元
冶工名護屋越前少掾藤原三昌
前住東福後住南禅文英叟清韓謹書
僧云此銘の内。国家安康の四文字に天逆あ
る由。天下にをゐて沙汰あり。江府駿府より京へ公
落着まで。しかし難波のこともなんちやう
らう。たゞ秀頼の運の極を鐘と讀たり。

将軍家より召まして韓長老御勘気を蒙り
ゆるしが以後は召よばれまして彼僧を遠別
〔召まして〕却て御感也。此銘分明なるは比ひ
あらじ。当代の名知識といふべし。此銘
文を聴せし感涙をもよほせり。大仏殿
〔見ん〕の志あるべしなくてはあるまじと悪果ぬ
家身の思ありに落書もやせんとて彼より
是を書様是は徳園一見の老人あり端
の枝よもとめ立る野山へ系端中へそのまゝより
吉野。多武峯。初瀬。三輪。奈良。立田へ一見

しかるに付けり。此は神無月下旬。擣衣は
漸くめぐりきて漸寒くなれば在郷にて
がうむしろ敷めぐらし作。又さんとさしこめかうや
花が月は後の世にあらそおかん法備。手浦
木曽冠者の尉。人の浄んいとぞ書たてた
る。花ぬまたじてむ前もうく絶ゆ色勝のか
まことるを知らしめるふる云の意も思ひ出
侍る代々草葉をおけるの露乃身ぞかしと
おりふしの記録に袂乃袖ぞつらつらうて
作へ

○唐が原の事
唐が原ハ今の鎌倉の名所ならびを出る也
り老人の伝へに唐乃里。唐が原ハ相模の
名所と云。いにしへを記して名付たる也。前
書をむずまさも鎌倉の古き世の事にも大国の
渡りといふべきを云ふまゝに。と月出度
あとのひ侍つらり日の是よりのかる。武蔵。相模と。
宗の鎌倉。猪熊より廿一郎の西
より鎌倉よりも付ればかわつの細なる
しるべとて眺しもろへ旅だ前に。○鎌倉

やかてしら山には露国都乃都にもかよい
の雲○名をあらはして。虎や伍らん東路にお
もとりふたる。廬か家とくらめ○行衆も
是らぬ風はさまざまの前句に○孫
裾の虎を伍ぞさ。我さをとゝて法
行助行られたる見。もろこしが家の前
と思ひあさま運けるよりやとらふ我やそ孫
披が家の言。東路とはりて国を所も治
定して。別に道言へ紀か翁ぞく
盛久の福ひに天日海の問乃まり。継の迄

日の本の廬が家を。此所ともてなす建ハ
鎌倉に治定して。我やくらくの盛久が名字
譲ひは作まる平家揺にも。東
鏡りのもかんえもて覚ん来たのしそま迄譲ひハ
世上の貴ひ風流たりしとし先俗語にて。
和哥乃伝授にて見ひてしく。名所の哥人
然とや。翁こく。鎌倉や。もろこしの
の前よく。廬が家を。鎌倉とらまさり。
甚よ運。もろこしが家の伝文と思ひあ
せり。昔言人とやかえらし。鴨の長明仁治三

年の秋八月中旬の比都を出て東
へ修行と心ざしおもむくゆふべのわかれをしたひ。
のほとりゆきかへりし人の書おきし旅の次第に
十日あまり。日数もへずして。鎌倉へ下り付
きぬ。海道の浪の花すくなく。箱根乃
山を越えて。日暮湯本といふ所に泊り
さまざまに。あはれをもよほしける時雨ふりて。
玉河の水にうかびて。岩瀬乃浪たつ
むすび。楊師寺の観音のまへにまうでて
又早河の民乃語るに。我が家に源氏の

玉の声となりて。うつる月影に。あつまれ
○そもそも。この宿の。たぐひなきこと。わざとの旅の
ゆるしに。玉乃声聞とかや。この宿をも立
て。鎌倉に帰り。月の夕つゆ。尽儀にかゝりて。
みるも。旅あはれ。秋の。いとゞ。ものこそ。
められて。大磯の浦。夜もすがら。など。心
ゆかしく。あさましきすゞしげなる。隙もなくて。折
ふしも。なくぞ。あはれまさりて。ひ
程に。鎌倉へ下りなむと。書たりしに。言葉
とゞかず。大磯。浜。原。宿の。あはれぞ。浪の浦の

也。されば鎌倉の方角。東ハ六浦。南ハ小壺。
西ハ稲村。北ハ山内也。然則ち。扇ケ谷ハ稲
村乃西にも知れたりところはまれなりそ。
むかし鎌倉ちんじやう家公家殿上人。侍人
等人来集ありて。名所旧跡をとへ待るにお
のしとや。長明鎌倉までの旅行にぞ
あるまじく知りのまで前栽とく。長明殿乃流
連くるなりぐさむやとて。和賀江のつき
路。三浦三崎乃。浦々を一見し。鎌倉へ帰
りぬ。是よりまく思ひあはせり。吾妻鏡第十
九巻に云。建暦元年。辛未十月三日。鴨
の社氏の。菊大夫長明入道
法名蓮胤。雅経朝臣の挙に依て。此間下向せしと。
将軍家へ参りしなるとかや。度々にをよぶ。
しかるに今日。幕下将軍家。御忌日にあた
れり。法花堂に参り。読経念誦せる
ある。懐旧の涙しきりに催ほし。一首
の和歌を堂の柱に注せり。○草も木も
びきし秋乃。霜消て。むなしき苔をはらふ
山風と詠せり。扨又長明鎌倉一見乃とき。伴

乃孫頼紀よりつく。抑鎌倉乃たちとめとゆせ
む故右大将家と申え源氏の流のみかど
乃九のしのそつこゑをだけさんまうけた
里さりみし治義の末まわらりて義無
をおびて朝敵をたひらけ忠賞
志きりふくうかて将軍のめしと给つり。
業鏡をと前よ志め紀祢と玄御よわぶめ。
なるらりれ末し繁昌の地とあまつり。卆
まも鶴ヶ岡乃家八松柏みどりぃ翼く
苔く藤蘂のそうへくるかし陪従を

宗そて后妻乃治補系とたたしむ乃月の
殺生禽るを行あつらず宗禅ふくし三年祇
まつりむとと申也。二階堂ハ将よ勝つる
寺也風乃つうり月よかりやさしかるの瑳
霜よえしこき機叠の志やうごんもりて
しめて井泥のふりとまゑるまで将よん
ともりて見也。大治堂と申ゆりの石窟
乃さびしきをとらりて道場のわらたゐる
とひらりしらゆ禅僧庵なをふ月との
作りて假宗の況をとりて行法座とう

さう。風とこうなへよ。今殿乃ひゞきことさそ
ふ恋乃こなりむと。代く乃将軍以下。取り添
らまうる。松の殿しろ。藤の寺。すもちくよ
是なり。しは中まても。は由井乃浦と云所
よ。阿弥陀乃大佛と。作りなさうし。給ふる
人ありや。ぐくいさすひまりたまでだうと
くもえ。頭しことの。おうりと承るよのとき
遠江乃国の人。浄光上人と云者ありて。道わて
延應の比より。関東の道俗。すゝめて
もとめ。仏像を作り。堂舎をと立さうらふ

高くそびえて。円天の雲よりも。白毫
あらたなるみぎり。満月の光とかゞやき。仏
像をあふぎもつ。あま三年の内に。しとゝあふなり。
堂舎十二棟の。うちへ。こうやうこんれうあらた也
仏法東漸乃。御告よあらはれて。権化ちうら
をくりつるうとくわ。わしまつてくえんあうやうの
かれと。がん雲かよえんと。ましもしきな
久しき。元日をとつるまでに。たゞ。松乃こそ。恋
き。悔るゝぎき。霜と云。しとぞばあしく
遍めて。秋よりさそ。あるこめ。そのかが。渡と

李陵蘇武
漢代大将也
天竺饒ヘ向フ
共ニ囚レト成テ
詩心ニ落テ
蘇武ハ別レテ
朝ニ帰ル

李陵蘇武がちぎりまつりし。十九年乃旅のうちへ。李陵が鶴
まつりし。三千里の路をへだつる身より思ひて涙
心憂もとむるにまつし虫乃涙をやくらむ果て。
松吹風の嵐乃こゑぞ。いとどそぞけしく哀り
まさまつる。涙くしと都乃うらさと詠や海
打し己へ弱乃為金。雲よ漂ふ乃哀也
○帰るをきさ。春をたのむ乃為今のなさ
てや雁乃音よりいでぬ。去すよ、さなぎ舞抔の
たりわするもの跡。そうらざるよどこのます
ありて都へうつくさま取めぬ古さ比乃うち。

水ぐきの跡を書がけるとし、行をとこら
さくハなよりうむ我よあくる跡ども古へ
帰るよろこび八木賀辺よお仰する心憂を
○古をへぞる山路乃ごとしぞなもいぬ家乃。
めしさをやこさんとにもさこて十月廿六日
乃曉もそでよ鎌倉をとゞく。都へおもむく。
宿の涙よ書流く○ゐまぬれと都を
いそぐ今朝なきまでげをとゞ名残のおし
きを宿もとよめり。彼長明ハ後鳥羽院
乃御字のん世所来たる人也。彼は

大原山のおくに隠居して四十乃比より六
十あまりになる迄。菰の身をかくし果さ
れし是ハ方丈記とて双紙に書あらはせり。
さて件乃路次記の書はじめより
凡六百年乃むかしより今付びさいの露やう
やくにたゝぬものとしてえだなきとへ丹なく
てもあらしく曉鶯もともにわうをぞさ
しているつゞらに徑をつたひしとき思ひ定
めぬる稿をなしまでも使白楽天乃男ハうさ
雲に似てわかうる人霜に似たわと書

ふるきおもむきにあらすかせらるると記した
まへて。長明が東国修行ハいづちの比と知道
ふりと撰述せられ。さまでも吾妻鏡ハ人せ大
集の題号に臆じんのきうを往しるく
といへども右の東鑑とかんがる刻だ件の路次
記の年号ね遠せり。長明ハ鎌倉へ下向ハ天
弘建立以前実朝の時代也。建暦元年よ
り。仁治三年迄ハ三十二年以後也。さうる
とうんぞ長明大に一見の沙汰あるべき也。
此批判せんかりといへども件の路次記ハ未の

世までもおほくの人の賞くはへる文なりけれバ。
年号お遠くに。人数海あらんや。数よ記し
侍るなり

○熱海湯治の事

此文ハ。今ハ伊豆の熱海の湯ゑ養生のよ
しといひ。ハく。吉人今ハぬる老を例なり
と。秋の中湯治せしハ。此所の眺望ゑ絶よ
こゝ也前の海づらよ大島。新島がうびさ
相の濱邊よつゞき。浦里多かんえたりハ。
しかよ見る山そびえ。比企乃地蔵ハ。此湯

乃鎮守。毎日毎夜ゑうよ参上りぬれバ。のふ
参詣ん。押もつしもやそ雑らぬし霊湯也。
此しも八月十五夜の湯よ月の影をさし
うつりまで見なるに。霜月の月の湯よ
入をおすめのこゑさもやこゑや志あんと口号
ぬきまで宿乃おるじ白井と云翁やうて旅
人ハやさしくも。ここ霜月の月の湯ゑ縁
なひたりま我郷よハ。湯を湯とて光ある
の湯よとおくも三国無双の名湯也。いぞれ
湯の由来を語りやさんごもまで。ありし

はまぐ越海の翁みとゝ云て年乃ほどハ
志らまられ老人へゑつしぎぺきん今番拖德せら
まつハぞ乃らゝん。人王十四代仲哀天皇乃御
宇うとよ豊時の仙王とやしハ。伊豆乃国式
法山よ南しまもと。衆生病死とありまさ仏
まゆそて乃こまらく願くハうまさ。一切衆生の
身がわりよ立とく。人のひびくよ今末來
やりくとあるそて見ちうぶんあくぶる
ことを請取べし。人間乃病苦とぞ乃ぞさるる
つとん願ハ肝よめつゞく。祈りすふ仏も

是とふびんよ思召りしよらや佛ハ一切衆生。
のぜごう現世わんとん後生ぜんしよと税
あへむ仏方便すとく。此湯をひきさあしまふ。
然ども此湯をきさある薬方便よ天地くる
やことなり。三七日がそうちう。六種まんど
うせり南うやく時見志づまわ日海かハ。
くらやこ見えきまへ乃あらそて志ろうしと見
ゆるわく両日や。五雑やかさつ聖衆の
霞乃ごとく何うつまし百千万億乃。歌舞
音楽をそうしまへて。東方薬師如来現。

妙くてしこと法華経をよみ人の病を治し入
此湯。病則消滅。不老不死と祈誓せし所也。天
人八雲よりあまくだりて。又襄のくわんしとかや
まこと花から激妙音菩薩いさやうらんせと。八大
龍王のごとく海上ようらんで三熱を
わきまへ。角をうちかけて礼拝せし。海底の
うろくづ迄も彼のようなびの里生の縁
結ごとくなりしかば。おのづから有様
弁ずるかたわりなく。めでたよいつも人のよをそ
とや。日本國中に老若男女。此所へ

わかれとおもひては湯に入ぬまでに病こと
なかりき平愈をなせる。然間國土あんせいに
て人の寿命もながくやうるなんよろこびしもの。
又内てかりくて湯本に寺あり。薬師
あるたのむる寺社ぞ白井となりけるとかや
其時せんい菩提所なるによりてかれ
ら。温泉院と号せし。又薬師の御本にと。
湯前権現とかうござりける流湯に。此
えんぶだいの人の病をうけて此湯に入る
だ病にきえうびて老せずしなせず或

八ハ七難をのぞき七福しやうずべしと云

くるがゆへに、生みてハ栄花さかふるよほ

うりて来世のハ、無量寿仏の国に生れながら

くたのしみにあふべしとかや。又、所々いづく

昔八代湯にて諸病を治し、今る長命あり

てそれ此所より今の世まであまたありし

いんの丹井若く、昔の人ハ摂沢の流毒をのぞ

かく数寿命なりがたくさうらふ今の世の

人々南秋の深恩をしらず、ものゝ徳を忘れ

天をいつはりそでよそもり、末代の世の

生たりとも遁ざるがゆへ病治せずといへども、翁一百

余歳をたもち、ひとへに此湯の善徳を得たり。

深くたのしみをもてあそび、敬せよと申されけれ

し。又云く、此湯ハ昼夜二六時中、子の時刻

と待て入べきとあるくはしきえんに、毫りさくも

ひまをとらず大せつによひぐち、まことによろしかるべき。

悦びの其程や。是ぞあるべき子細ぞや。

由井若く、そ是仏ハ今るの病苦をのぞきけり

むかため、種々方便をめぐらし給ふ故あり

寧地獄の湯のおつ人数もちんきさ。ぐまえ

大ぐれんのこほりもとらけまつしそを如来(にょらい)
乃光明(くわうみやう)すてらし給ふがゆへ。たちまちのち
熱湯(ねつたう)と成かへる劔鋒(けんきやう)も地獄(ぢごく)乃猛火(みやうくわ)け
して清涼(せいりやう)風となると是説(とけ)り。然バ地獄(ぢごく)や
念じる時。此湯(ゆ)もさきある古(こう)郷よ○熱
よりたつみよわたる地ごく一りあまりあると
ころおつ海とのふと詠(えい)せり。又問(とう)て云合る
病(やまい)乃療養(れうやう)食一流(りう)乃著作(ちよさく)よあらはせり
又本草(ほんさう)の湯治(たうぢ)と云ハおのふち槐桐(ゑんじゆきり)わらの
さのわかて。又薬(くすり)是ふ末也。善(よりき)ぞくて石(せき)

菖(しやう)。しもとの葉(え)のや車前(ぜん)草(さう)。やうび馬(ば)鞭(べん)草(さう)
牛膝(ごしつ)是ハ草也。右乃湯(ゆ)ハ寒(かん)熱(ねつ)をなをざる
ふ根(こん)又いぞ湯(ゆ)ハ熱(ねつ)也。よく〳〵さと治(ぢ)もとく医書(いしよ)
よ記(しる)せり。然ぞ熱海(あたみ)の湯(ゆ)まて寒(かん)熱(ねつ)の
病(やまい)ハ川まで治(ぢ)する也。白井(しらい)声(こゑ)くそてまさ病(やまい)ハ
寒(かん)熱(ねつ)乃二法(ほう)よりおこるといふ先。おほくハ寒の
寒を積(つも)りて又川(かは)夏よ至りて熱(ねつ)をまづ
らふ也。水火(すいくわ)ふりふから也ものようちぢかふハ
むかしてん皆死もと。是ハこれ仏(ほとけ)。大慈(じ)大悲(ひ)乃
方便(はうべん)なり。寒(かん)熱(ねつ)和合(わがう)ハ無益(むえき)業(やく)なき也ぞ寒(かん)

ともおもひそめ。契をとをさけるかの前の方
病ともなく浪る女の向くいはく、此所をとおく
みよしのひなこそなる里をとふ。ひとつが里と
云。彼は浦をもいひ。きか浦といふ。是を名
所おほく猶も。白井がくるしけ是名所也
一年宗長湯治せし心がけある家にや。当所へ
まかり、医王寺に援寄しあひ朋友三人あ
り。宗長の発句ありて千句百韻せ
られしが、浪まで心をうつされその懐
紙ども残しとどめたりとぞ。ここに愚老

躑躅を杜鵑花と云ふ事は、杜鵑ハ
鄭公也。杜鵑一
作ル血を吐き血に染めて
流るるを此花ハ咲く時の血に
染るといふて杜鵑花と
も名を云ふ。杜鵑ハ
さいふ人八杜鵑
とも云ふ
宗祇の発句にも
たぐひなき花の色

披きて拝しぬる前書あり
豆州熱海湯治の頃もよほしに　宗長
岩清水くしくもゆてふる名乃いで湯哉
湯ハ鄭陽炎よりたゞいふなりや。家隆の家集にハ折々見え
ざりしをあつめ名所をゆかしきものに思ひ湯本にて
たまたま咲く山川花の　珠見
とし乃ある早瀬の霞み芸芸て　法泉
生田のさとも山ひとのさき風　宗長
此四句目名所生田ハ。としかるへき世あかりきませくやかくく秋ハり
なる時なりや。此もとよりそしみ津の国の生田の森の秋
乃初風○さけふかしとかたく家隆○秋とふ吹の風
風定へ家ニ出ての前のさ句也
雨のくもりに盛りハ多井秋　永祀

むらさめもきえておとしたしく夜あらし　珠易
むさし野や霧さへたちそやらずらん　宗長
○村雨乃露もまだひぬまきの葉に
霧立のぼる秋乃夕暮ば斉の句よる也
あさゑよりひもとくうびの袖　法泉
右百韻なれど略し面八句斗を記し侍りぬ宗祇乃句に
たびねまくらとおもひしいめのまくらと云前句あり
老が身よ幾とせふりてきえのこるらん　宗長
宗祇よ来る八十二年までいきてありけるや消之
露と消ぬ露乃消てみえとく古あ哉ゝしく云云
宗長ハ長命と知られけり。生国駿河の嶋
田乃人なるとかや。老後ハ鎌倉乃天源庵
に移住し逝去せしハ八十五とかんえたり。寺
内に宗長屋敷と号し古跡あり。鶴塚
まで残る発句に。まくら鶴もうへげる。鶴塚思乃
松とやさすまつし。柄又是鶴河のためとほしよ。
まりこ乃宿の入口に柴屋と名付ル一庵あり
里人是を旅人乃まれに宿る也。宗長の
塚かりといひ宗長の現住の発句よ○梅乃香を
小柄なる音羽又昌塚○古跡を名乃ミ知るまじ
里芸乃墓中く縁せし是今思ひ出侍り
ぬ。由井云。熱海すゞく是塚。○夜の日や山も

右湯乃。塩ぐもりにせてまじたり。古奇よ。
○名ある所。錦乃浦とまうくかん道一だびたぐ
ものをも乃。ひとびとが里しくなめり。此
湯より北に川。此乃ひがり。波かうほかぬ
家ならびにかがらさに浦よ。錦とかしこもとごとし
月海上よりうつでたる夜此よ。似たる
やうるみしけんめでられば。錦といふまたいしてう
さいふか里といふ名付しまかり。又閑くら
くしは立所と。熱海とうく文字乃ふ細わ
里や。白井ふ紙八一切群ありあうらば迄

是ぞくいりんとの流蓄ひゆ。此湯。海へ流入
てうかおろしてふろうろ川迄ぞ巻て
とあるかまぬ湯の海よ。熱海と書しかたとよ
み。温泉とかまでいで湯ともいふ。皆是此湯
乃徳。徐なりといふ是ぞ比ぞいつ。誠よる
雑ミ湯のいでまぞやうく権現乃治兼悲
れ威光と末代までも雅かわふかざくんとす
まふく信じて一七日湯治しぬきゆ。信ず
る人はや。遠例ぞうせんと快気もとなや
うゆ盛て給りぬ

婚礼上之終

土肥経平蔵

110X
157
3